１　研究計画

（１）　研究主題

主体的に学び、共に高め合う子どもの育成
～深い学びが生まれる授業づくり～

（２）　主題設定の理由

【社会の要請から】

人工知能が飛躍的に進化していくこの時代において、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みであるということが再認識されている。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大などにより、「予測困難な時代」の生き方について考えることが重要であることを実感することとなった。これからの社会を生きる子どもたちにとって、自ら課題を見付け、自ら学び、考え、判断して行動する力を身に付けていくことがますます必要になってきている。

学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行い、対話・協働を通した学びの質の向上を追究することが示されている。「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を踏まえ、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという「見方・考え方」を各教科で働かせることができるようにすることが重要である。また、令和３年１月には中央教育審議会から「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」が打ち出された。この「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組むことで、他者と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓くことのできる力を育んでいきたい。

【学校教育目標達成の面から】

本校の教育目標は「共に学び、共に生きる子ども」である。また、目指す子ども像として「品性の豊かな子ども」「主体性のある子ども」「協働性を発揮する子ども」を掲げている。子どもが楽しい、行きたいと思えるような安心できる学級の中で、互いに認め合い学び合いながら、好奇心、探究心、向上心をもって学び続ける子どもを育てることのできる教育活動の充実を目指している。本主題に取り組むことで、子どもたちの資質・能力の育成に向け、教育活動のより一層の充実を図っていきたい。

【これまでの研究のあゆみから】

これまでの道徳科での学びで見られた、問題を自分事として捉えて主体的に学び合おうとする姿や、工夫して生活や学習をよりよいものにしていこうとする態度を他教科につなげていきたいと考え、令和４年度からは「主体的に学び、共に高め合う子どもの育成～深い学びが生まれる算数科の授業づくり～」を研究主題に掲げ、算数科を研究の中心として取り組んできた。道徳科で身に付けた力は、算数科における「学んだことを生活や学習に活用しようとする態度」につながっている。

研究年４年目となった昨年度は、「数学的な見方・考え方を働かせ、学びを深めることのできる授業づくり」と「ＩＣＴを効果的に活用した授業づくり」を重点に、授業改善に取り組んだ。授業づくりにおいては、ティームで授業を計画・検討する姿勢を大切にしており、日常的には学年ごとの指導ティームによって、研究授業の際は学習指導部授業研究班のメンバーが加わって進めるなど、本校のＴＴ教育の伝統を生かした取組となった。成果としては、導入や学び合い場面での工夫が挙げられる。導入では、身近な場面を取り上げたり、体を使って場面の様子を確かめ

たりするなどの分かりやすい問題提示や、既習事項の確認などをして解決の手立てを持たせたことが、子どもたちが解いてみたいという意欲と見通しをもって自力解決に向かうことにつながった。さらに、様々な解決方法を選択できるようにしたり、協働学習支援ツールを使って自分の考えを説明したりすることで、子どもたちが主体となって解決に向かうための話合いができた。教師も、学び合いの適切なコーディネート力が高まってきたと思う。大切な言葉や考え方について子どもたちに問い返したり、繰り返し使う場面を設定したりすることで、子どもたちの気付きが深まった場面が多く見られた。多様な考えにふれることが、多様な見方へとつながった。また、秋田大学教育文化学部理数教育コース数学教育研究室の加藤慎一氏をお招きし、校内授業研究会等、様々な場面でご指導・ご助言をいただいた。授業実践に生かしていくヒントを得るとともに、授業後の研修会では、教師が一方的に学びを授けるのではなく、子どもたちが必要性を感じて自分の課題として取り組むこと、数学的な「見方・考え方」（どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくか）が重要であることを教えていただいた。そして、数学的な態度とは、子どもがそうせずにはいられない状況を作り出すことであり、こうしてみたい、これを使ってみたいと感じる原動力を育むことが大切で、教師が、子どもの表現（図の描き方、操作など）から何を考えようとしているかを見取り、そのよさを分かち合う経験を積み重ねることが数学的態度の涵養へとつながる、ということであった。成果が見られる一方で、自分の考えを順序立てたり根拠を明確にしたりして説明するための支援の在り方や、自分の考えや変化について振り返る力を付けていくための方策について、更なる工夫と研修が必要であることが課題として残った。４年間の算数科を窓口にした研究から、数学的楽しさや数学のよさを実感できるような学び合いとそれらの活動を支えるＩＣＴの効果的な活用が大切であることが明確になった。今年度は、その成果を生かし、他教科においてもＩＣＴを効果的に活用しながら個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図りたい。

【子どもの実態から】

令和７年度の本校での算数科アンケート（全校児童、６月と１２月に実施、６月は１年生を除く）と秋田県学習状況調査の「学習の意欲等に関するアンケート」（４、５年生）の結果を見ると、昨年度に引き続き、子どもたちの多くは、「勉強が大切」だと考え、「普段の生活や将来の役に立つように勉強したい」と考えている子どもが多い。友達と話し合う活動を通じて考えを深めたり広げたりすることができていると感じている子どもが多く、学び合いのよさを実感していることが伺える。一方で、家庭での学習時間は全県の割合を大きく下回っている。学習習慣を定着させるために、継続的な声掛けが必要である。

算数科アンケートにおいて、「算数科の時間の勉強が好きだ」に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と選んだ子どもたちは、その理由として「計算が好きだから」「問題を解く過程と問題を解いたときの達成感が好きだから」「自分の考えをたくさんの人の考えと比べるのが楽しいから」などを挙げていた。「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を選んだ理由としては、「計算が苦手だから」「難しい問題や理解できないことがある」「理解するまでの道のりが面倒だから」などを挙げていた。問題解決の楽しさや達成感を感じる子どもがいる一方で、それまでの学習の定着度が影響する教科の特性により、学年が進むにつれて苦手意識をもつ子どもが増えていることが分かった。個別最適な学習の在り方、学び合いの場の学習の工夫について課題を残す結果であると考えられる。

秋田県学習状況調査の算数科の平均通過率については、４、５年生については全県平均を大きく下回る結果となっている。基本的な計算などは定着してきてはいるが、十分とは言えない。問題の意味を正しく捉えること、数量の関係を捉えて式を立てること、言葉や式を結び付けて、根拠を示しながら説明することなどに課題が見られた。また、ＩＣＴ活用に関する質問項目の回答から、授業の中でのＩＣＴ機器の使用頻度については、どの学年も昨年度と同様に、日々の授業の中でよく活用していることが分かった。ＩＣＴを使って、調べたり調べたことをまとめたりすることに意欲的に取り組み、そのスキルも徐々に向上している。

また、子どもたちの学習や生活の日々の様子を見ると、算数科の授業のみならず、学習活動

全般において、友達の考えを聞きそのよさを見付ける力、根拠をもって自分の考えを話す力、そして自分の考えをもち、深めるための基礎・基本の力が十分ではないと感じる場面が見られる。このことは、学習習慣づくりと連動してくるものであり、算数科の授業時間だけで育つものでもない。今一度、学び方と基礎・基本の力をしっかりと身に付けることに立ち返り、その上で学び合う楽しさを実感できるようにしたいと考える。

以上の実態から、算数科のみならず、各教科の学習において「各教科における表現の仕方を用いて自分の考えを表すこと」「目的を明確にし、子どもの言葉をつないで話合いをすること」「子どもの思考のプロセスを引き出すこと」について指導を工夫し、学びの場を充実させ、「理解や思考の高まりを実感できる」授業づくりに取り組む必要があると考える。それにより、既習事項を用いて自分なりに考えたり、他者と協働しながら粘り強く取り組もうとしたりする姿勢が育まれると考える。また、それを支えるツールとしてのＩＣＴの活用について、引き続き学校全体で系統的に取り組んでいくことが必要である。ＩＣＴを効果的に活用することで、視覚的な理解や自分の考えを伝える機会、学び合いの充実につながるであろう。さらに、学びを支える基礎的・基本的な知識や技能を習得するための方策についても共通理解を図りながら実践していくことで、子ども自身が学習内容をより確かに理解するとともに、「分かった」「できた」と満足感を得られることで、更なる学習意欲をもつことにもつながるのではないだろうか。

（３）　副主題「深い学びが生まれる授業づくり」について

「深い学び」について、例えば、「学習指導要領　解説　算数編」には、「指導計画作成上の配慮事項」として以下のことが述べられている。

> 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
> (1)　単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、数学的活動を通し、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、数学的な見方・考え方を働かせながら、日常の事象を数理的に捉え、算数の問題を見いだし、問題を自立的、協働的に解決し、学習の過程を振り返り、概念を形成するなどの学習の充実を図ること。

算数科を始め、各教科の指導計画作成に当たり、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善が求められており、深い学びの実現には、「主体的な学び」と「対話的な学び」が不可欠である。深い学びをつくりだすために、対話が生まれるような問題場面の設定や学び合いの場の工夫が必要である。さらに、学び合いにおいて自分の考えをもつためにはその基となる力を備えていなくてはならない。相手の考えを聞き、そのよさや自分との相違点に気付く力、自分の考えを根拠をもって話す力、自分の考えをもつための基礎的知識が合ってこそ学びが深まっていくと考える。

（４）　目指す子どもの姿

○見通しをもち、進んで問題の発見と解決に向かう子ども
○考えを適切に表現し、学び合う子ども
○自分の考えの深まりや変容に気付き、次の学びに生かそうとする子ども

（５）　研究の仮説

各教科の学習指導において、自分の考えを表すための指導、学び合いの場の設定、多様な学習形態などを工夫することによって、対話を通して思考が深まる学びが生まれ、主体的に学び、共に高め合おうとする子どもが育つのではないか。

（６） 研究の重点と内容

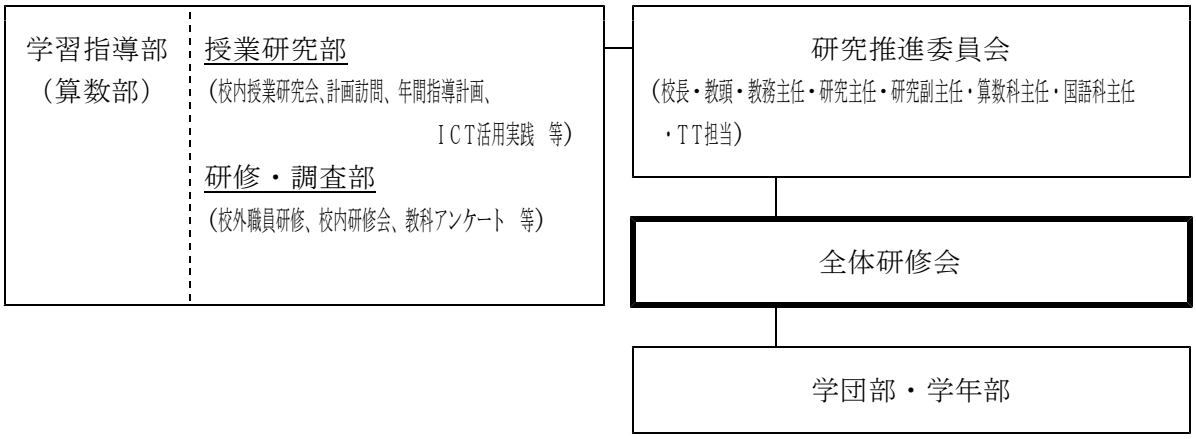
重点１　自ら考え、表現する力を育てる工夫

①基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得する指導の工夫
②必要感をもって取り組むことができるような課題設定や学習過程の工夫
③一人ひとりの確かな学びを支えるためのＩＣＴの活用の工夫

重点２　考えを深める学び合いの充実

①ねらいに迫ることのできるような学習携帯や発問の工夫
②ＩＣＴを活用した学び合いの場の工夫
③思考の高まりを実感し、新たな課題を見いだす振り返りの活用

（７） 研究組織



（８） 研究の進め方

① 学年研究計画の立案
・子どもの実態や教師の願い等から各学年部で重点単元を設定し、学年研究計画を立案する。

② 授業研究会の実施
・各教科の授業づくりの改善・充実と学習全般における基礎・基本の習得を目指して授業提示や協議会を実施する。

③ 校内研修会の実施
・各教科におけるＩＣＴの効果的な活用についての研修会を実施する。

④ 学習アンケートの実施
・子どもの実態や変容を把握して授業づくりや学習習慣の確立に生かす。

（９）　**研究の予定**

＊学習指導部会は、毎月開催。

月	内　容	月	内　容
４	研究計画の作成	10	後学期研究計画の確認
５	研究推進委員会① 学年研究計画の立案 （全体研修会①）	11	校内授業研究会②
６	秋田市教育委員会計画訪問（６／１８）	12	校内授業研究会③ 実践集録作成計画立案 実践集録の原稿作成
７	中央教育事務所長訪問（７／１６）	１	実践集録の原稿作成
８	研究計画の中間の振り返りと修正	２	研究推進委員会② 次年度年間指導計画作成 全体研修会②
９	校内授業研究会①	３	研究の振り返りと次年度に向けた準備